

塾から見た子どもの基礎学力の現状とその改善

高濱正伸

1. はじめに

花まる学習会の高濱と申します。もともとは大学院にいるあたりから、予備校とか高校生の大学進学講師のアルバイトをやっております。そのなかでそれなりに楽しさを覚えていきました。そのなかでも、どうにもならない子どもの事例がいくつかありまして、そのどうにもならない理由というのが、そもそもやる気がないということであり、そこには小学校低学年時代からの母親との関係、その頃の勉強スタイルが大きな壁になっているということがわかりまして、根こそぎ変えてしまおうというぐらいの理想をかかげて、小学校低学年の学習塾を開きました。それが8年前です。生徒は徐々に増えていって、今、一期生が高校一年生になっています。結局、全学年みることになり、現在700人ぐらいの生徒を抱えています。そのなかで、今日は、塾からみた学校の現状とその改善というようなことについてお話ししようと思っています。

2. 学習塾に来る子どものニーズ

学習塾に来る子どもは二つのニーズを持っていて、一つは、上にあぶれる子どもです。要するに、学校は退屈だし、何のために行っているのかわからない、体育と給食と20分休みのために行っているというような意見です。事例をあげますと、これはトップクラスの中学受験をする子で、5年生ですが、ある授業で平行四辺形の面積を習ったらしいです。「塾組」と彼は言っておりますけど、「とっくに理解してるし、平行四辺形の面積を使った非常に複雑な問題もとっくの昔に解けるのに、画用紙をどうやって切ったら面積出るかなみたいなことを1時間やらされて、立てかける横になったねみたいな話して」というようなことを言っていました。できる子たちはすごく進んでいますから、もう人生の無駄だというような反応です。先生のために我慢してつきあっているとっています。これは決して少数派ではなくて、上にあぶれた子達は学校の授業

に対してははっきりこういう議論をしているし、この点においては親もかなりの部分はっきりしています。ですから中学受験前の12月1月になると学校を休む子どもも増えてきています。

それから、一方で、放置されたまま育ってしまったという子が中学になってから来ることが多いです。それはどういうことかという、お母さんも塾には行ったことがないし、「公立でどこか行けるところがあるだろうという感覚でやってきたんだけど、どうにもなりません」ということでかけこんでくるケースです。話してみると、いろいろやるべきことをやってきていないということを感じます。学校のノートを見ても、板書などは写す子なんですけど、「テストでできなかった問題をやり直したことがない」とか、「ノートにまとめるといつてもしたこともないし、まとめ方がわからない」という感じで、かなり低いレベルで基礎学力が止まってしまっていると思われまます。

要するに、何かのニーズをもってかけこんでくる子どもたちにも二つのパターンがあって、一つは今の学校の授業で満足してはとてもしゃないけどトップの学校には敗れてしまうし、やってる人たちがやってるんだから自分もがんばりたいということで来る子と、学校におまかせで来たけれども、学力がつかず、やる気もちっとも伸びないので何とかしてくださいということで中学ぐらいであわてて来られるような子どもです。

学力に関して概観でいうと、現場で預かっている目から見ると、火を見るより明らかに「落ちているに決まってるじゃないですか」というような感覚をもっています。それから、学校外で投資をしている子どもたちと放置された子どもたち、二極化というもの非常に進んでいます。それから、学力の格差が広がって、われわれへの要求というものも非常に大きくなって、こんな先生なんですよという具合に、ずばずば学校の文句も言ってきます。要求は要求として聞くんですけども、これだけいろんなこと言われているんな子どもたちがいて、集団授業だけで運営する学校の先生は大変だろうなということを感じます。また、学校には

「学習法の指導」というのがないのではないかということにはよく感じます。昔は学校の先生にいろいろ教わったけれども、今、そういうものはあまりやらないのかなという感じがします。加えて、個別対応の工夫というのが全くない、認知カウンセリングに私も非常に興味をもったのはそういうことを学校でやろうとしているのかなということがちょっと気になったのもあるんですが、今のところ外からは見えません。塾はお金をだせば個別でみてくれますから、個別のニーズというのはものすごいんです。それから、私自身の一番興味あるところですが、意欲を持たせる、要するに勉強をやる気になることを小さい時から邪魔さえしなければ、人間はもともとやる気があるものだ、というふうにお母さんがたに働きかけて、勉強大好き、楽しいという方向へ持っていきたいというのがうちの塾のやり方です。実際に塾がいろいろ成功している理由に、「意欲を持たせることへの研修マニュアル」があります。その部分が学校にはないのではないかなというふうに思っています。

3. 塾として心がけていること

塾がわざわざお金を出してまできてもらっている以上は、何らかの要求にこたえているわけですが、学校と塾とでは、ここが異なるのかなということ、いくつかあげたいと思います。まず、先に述べました動機づけの研修を非常にうるさくやっています。これは、好意を持つ、信頼できるという関係がまずできあがった時点で、人間というのは基本的に、内在する学習意欲が必ずあると考えます。人間というのは必ず学びたがるに決まっているというところから始まっています。それは、「信頼できる。この人なら見てくれる」というものを感じるときに、素直に発揮しはじめるという考え方にもとづいています。つまり、講師が何をするかというと、好意を持たれる、信頼されるということを研修課題にしています。その要点は、しっかり認めて、最良しないということです。最良しないというのは当たり前だと思われるかもしれませんが、子どもたちが学校の文句を言うてくるときにはしよっちゅう出てきます。

研修の具体的な内容としては、8つあります。第一に、名前をとにかくすぐ覚えるということを指導します。20~30人だったら一日で覚えて、覚えた以上は間違えないということを徹底します。2番目、名前をいつも何度でも呼ぶということも言います。「ノート忘

れたの」という言い方ではなくて、「山田くんノート忘れたの」という形で必ず名前を付けて語りかけることを習慣づけています。3番、一日に一度は担当の先生が全員から何かを発見して伝えるようにします。つまり、何でもいいんですが、ハアハア言って来たら「今日、ハアハア言って来たね。何かいいことでもあって走ってきたの」というようなことで、その子から何かを一つ発見するということです。その子から発見をして、それを伝える。そこが心のドアを開くというような行為だというふうに思っています。4番ですが、我々が見ているのは、前のその子より、今日伸びた部分というのをしっかり見ておくということです。そのためには結構よく見ておかなければいけないし、保護者に毎回連絡帳を書くんですが、そここのところはどういうところが今日伸びましたということ、つまりよく見ているというアピールをしています。それから、5番は、ほめることはかなりうるさく言います。よく外見ばかりほめる講師がいますが、それは基本的に人間としてあんまりよく育つ方向ではないと思っていますので、内面、例えば困っている子に消しゴム貸したとか、努力してきている、言いもしないのにこんなページ予習してきたのかとか、そういうことをほめたり、それから先にあげた成長した部分をほめるということです。ほめていけないのは外見と比較です。勝ったねとか、そういうことをやられると、10人いたら5人ぐらい不幸せになってしまいます。必ず、「前の自分より伸びた」というほめかたをするように指導しています。教材も全部そういう主旨で作成してあります。タイムを測ったりする計算問題も、前の自分よりどれだけ伸びたかという伸びぶりや評価があるという形でやっています。それから6番、これはカウンセリングの基本ですが、「あいつが消しゴム投げた」とか、そういう苦情には「えっ、消しゴム投げられたのか」「乱暴されたんだね」「いやな思いしたね」と、受容・理解・共感をするにとどめて、基本的には子ども同士で解決させるということで、放っておきます。それから7番目に叱り方です。これは実は叱り方のロールプレイをします。新人講師は最初に叱り方、声の出し方、腹から出せということで練習します。一回怖くないと思われたら、もう全く通じないというのが我々の子ども観です。彼らはつねに「自分の自由になる領域」を拡げようとしてくる生き物だと考えていますので、怒ったら怖いということだけは最初にきちんと見せつけておく、ただし、□短く、□今やったことのみ叱り、□後を引かないということで、叱り方については研修を

かなりいろいろやっています。8番目は、元気がない子とか内気な子にこそ、こちらから声かけするということを習慣化するということです。新人の講師でよくありがちなのは、「楽しかったです、子どもかわいいですね」というんですけども、授業のビデオを撮ってみると、元気のいい子とあなただけが幸せだったんだねという状態なわけです。内気な子、日が当たらないほうにこそ、積極的に声かけをすることが大切だということです。それから、全くやる気がないような子ども、小学校低学年の例で話しますと、そこには、母子関係が崩壊しているということがあります。基本的にはお母さんを変えるところからはじまりますが、その場合、子どもには遊んだり、話をたっぷり聞くということを行います。1ヶ月ぐらいは勉強はいいからということで、話を聞くことをやっていく。そういう時間をとって、まず講師との信頼関係を築くという方針でやっています。

4. 喜び・おもしろさを伝える指導

基本的に、今まであげていったことというのは、外発、外からの評価とか、認められている喜びで動かせることなんですが、最もよくできる連中というのは、必ず本当の算数の喜びとか、解くおもしろさにはまってしまった子たちなんです。そういうふう最終的にはもっていかねばいけないということが一つの理想です。実は私もそれに実際にはまれた人間なので、それを精一杯伝えるということを次のステップにしています。まず動き出した子たちに対して伝えるのは、公式とか、証明の仕方ではなくて、証明をするおもしろさです。おもしろさをおもしろがってどう伝えるかというのを研修します。立ち方と発声とか、それだどつまんなそうだよ、というようなことをやっています。指導要領等の制約はないので、できる子たちにはどんどん面白い課題を与えたり、それから、先ほどの探求サイクルに入るかもしれませんが、しらない言葉は何個でも集めてみようというような発表会をやったりします。子どもたちは、やりはじめたら本当に二日、三日で1000語やったりするぐらい熱中しますので、そういうものはこっちで用意しているカリキュラムを止めてでも、どんどんやっています。動き出した者は、どんどんそっちの動かすままに軌道をとっていくということをやっています。これが動機付けについて我々がやっている大枠の方法です。

5. 学習方法の指導

それから、学習方法ですが、知識というのは本に書いてあるし、かなりよい参考書類というものはもうできあがったものがあるので、私たちがやらなければいけないのは、それは書いてあるよということです。要は、「自学できる習慣と技術」を身につけることで、教師として介入する大きな理由は、「より洗練された学習方法」を伝授することであると考えています。たとえば、中2でもきちんと座れない子がいます。そもそも座る姿勢がしっかりできないと長時間学習など耐えられませんから、最初に座りかたから始めるということが多いです。それから、鉛筆の持ち方も指導します。そのあたりからはじめて、学習計画の立て方、これは毎回立てさせてチェックし続けるというのが基本ですので強引にやらせませす。勉強というのは授業ではなくて、身につけるまでのサイクルが勉強なんだということは繰り返しいつも言っています。PLAN-DO-CHECK, 要するに、何かやらされたことをやるだけというのが勉強ではないんだということをうるさく言います。

また、ノートをとる意味の明確化ということで、小学校高学年からはこれを徹底します。要するに、これからしっかりと学習というときに、ノートというのはこういうふうにするんだということで、授業ノートの取り方を指導します。常にみんな4種類持っていて、まず授業ノートというのは、なぜ伸びない子が伸びないかという、ひたすら写すだけなんです。ですから、それをやらせないようにします。大事なことだけを選んで、ポイントだけ取りなさいと指導します。また、ここはきちんととってほしいという重要ポイントは、「はい、じゃあこれは全員しっかり写して」と言いながらカーテンをたらして黒板を隠します。やり慣れると、今度はちゃんと写さなければいけないことだとわかりますから真剣に聞くようになります。そういう形の授業ノートというノートを取らせませす。それから、知識ノートというのは、算数でいうと大事な公式だとか、定理だとか、それから、国語でいうと語彙とかそういうものを自分の趣味としてためていきなさいということでやっています。40才すぎた私だっけにまだに続いているんだよと言ってやらせています。そういう知識ノート、これは後に残すためのものです。それから復習ノート、これがもうザ・ノートと言ってもいいんですが、要するに勉強というのはできないことが次にはできるようになるから勉強なんだから、大事なこ

とはまず自分が何が出来ないかというのを客観的に捉えることからということで、テストでできなかった問題とか、問題集でできなかった問題のなかで、これはなるほどと思った問題について、上に問題を書いて、それから解答を次に書きます。解答を書く時には必ず「一気に書く」ということを習慣づけます。一気に書くことで短期的な記憶が完全なものであることが証明されるので、一気に書くということをうるさくいいます。それから、「自分ができなかった理由」をマーカーでも色のものを使ってでも書いて、さらに「ポイント」を書く、というのをやらせています。それが本当に財産だし、自分が伸びるためにとっておける宝物なんだよということで指導します。これが身についた子どもはまちがいなく伸びていきます。演習ノートというのは紙切れでも何でもいい、とにかく繰り返してできたかできなかったかチェックをして、問題集の問題の番号のところに必ず〇なり×なりを書き込んで、ということで、汚くていいものです。

加えて、質問の仕方を教えます。これも、実はそのこと自体ができない子どもいっぱいいるんです。低学年ぐらいで内気な子なんかはじっとしてたりして、その子どもにはこうやってそでをひっぱらせて「先生わかんない」って言いなさいというロールプレイからはじめたりしているわけです。それから暗記の仕方も指導します。暗記というのは五感を常に全部使うというのがいいんですが、自分自身の大学入試なんかの経験をもとにしているんですけども、とにかく、言いながら書きながら見ながらということでやるということを言います。それから、テストもやりっぱなしではなくて、ファイリングをする、そのやり方も伝えます。こういうものが学校であまりやられていないのではなかなことであるし、逆に言うと、本当にやられたら塾はつぶれてしまうというものです。

6. 学習環境への働きかけ

そうした学習指導とは別に、父母教育を定期的に行っています。これは、兄弟がいたら必ず愛情のむらがあつて物足りない側の子どもがいたりして、そこで、お母さん、あなたが変わらないとだめだということを言っています。まず親が変わってもらわなきゃということ、つくづく感じます。親の世代が甘やかされて育っているということがあるので、毎月発行のお便りの説得に加えて月に一度の父母学校、あと呼び出しというのがあってですけどもそれを行っています。子

どもからお母さんにすごくうるさく言われたということを知った時には母を呼びだして、そういうのは放っておいてくださいって言ったでしょ、というようなことを言ったりします。もっとお母さん自身、幸せになってもらわないと、子どもに目がいて、うるさく言わざるを得ないということがありますから、母個人としての孤立というものに対して、地域社会を擬似的に再現するというのもやっています。例えば、映画会。お母さん同士で開催してくださいということでやったら、もう千人以上のかかなり大規模な映画会になったり、お味噌作りとか稲刈りとか、そういうこともしています。稲刈りは今回は父と子ということでやったんですけども、お母さんをカットすることで、改めて父親としてはじめて子どものこういうところを見ましたということがあったり、今のところそういう体験教育をかなりやっています。

それから、個別の質問時間を定期化しています。こうしたことを学校ではどれぐらい今の授業でやりきれものかなと思いますが、もし学校ならば例えば地域の大学生とか、いろんな利用方法があると思いますけれども、うちは、日曜自習室というのをつくってまして、そこで自分が何が分からないか、学習方法の何が悪いのかというようなことを明確にさせるような時間として、担当講師が必ずいて、順番に相談を受けるということをしています。それから、後輩を教えるということの一つの美德として奨励しています。ちょうど1学年2学年違うと、偉そうに教えようとするんだけど、自分の言葉がなかなかうまくまとめられなくて、そこで逆に教える側が成長するという視点で、これを奨励しています。

7. 塾・学校はどうあるべきか

もちろん、どの塾も社会のニーズをかぎとってやっているんですが、うちに来る子どもの傾向として、最大手の有名な進学塾、中学受験に強いというところに行っている子どもたちが残骸みたいにして来塾することが非常に多いです。要するに、大手ゆえに、大手カリキュラムがあつて、その塾だと驚いたことに、ノートはとるなという塾なんです。次から次に、毎週毎週、薄手の演習問題をあげて、とにかくそれをこなしていけば、山ほど全部こなせば、それは6年になったときに力になるんだという理論らしいんですけども、6年間精一杯やってきたんだけど、もう...という子が結構な数来ます。とにかく実績があがっているところ

に何にも知らない母親は集まりますが、もともと通るはずだった子たちがそこに行ったというだけで、伸ばしたりということとは全然違います。ですから、そこで挫折した子たちには、もう中学受験は今この時点で諦めて、大学受験に向けて勉強の仕方を直そうということで、とにかく傷ついた心を癒すことから始めています。ですから、大手塾で名が上がっているからといっても私は全然信用していません。それぞれの個々の先生方もいい人もいるとは思いますが、塾もいろいろあります。

最後に、学校はどう変わるべきかということなんですが、私自身も公立、公立、公立で、塾もほとんど行かずに育ったんですが、やはり先にあげたような「学習方法の指導」なんかを徹底してやられて、「個別の時間」というのを何らかの形で備えられたとたんに、かなりの塾はつぶれてしまうだろうと思います。また、そういうふうにあってほしいと思います。教育は本来、チャンスは平等で、お金に関係なくどんどんやる気があるというか、目指せばあがっていけるというものではないと、社会全体がだめになっていくと思いますし、塾のいい部分というのをどんどん取ってほしいと思います。私自身も昼間に教える方が子どもは絶対にいいと思っていますので、いつかそういうものを作りたいなと思っています。それから、学校にも競争原理というのは取り入れないとだめであると考えます。私が述べた程度のことは、基本的に塾経営で競争にさらされていけば必然的に行き着くものの一つなので、つまり、売れなければ首になるかもしれないというところをどんどんさらされていくべきであろうと思います。ですから、学校単位でいうと SAT 的なものを例えば取り入れて、学校同士が競うとか、先生同士もやっぱり競って、やる気のある人には、それなりの何かがある、お母さん方の苦情が殺到するような方は退場してもらおうという、そういう「社会の当たり前の原理」というものを取り入れてほしいなというところがあります。

本論文は、2001年度第2回プロジェクト研究会(2001年10月20日)に話題提供され、学校臨床総合教育研究センター年報『ネットワーク第4号』(2002年3月31日発行、Pp 21-24)に掲載されたものである。